

## 書評 03

毛利敬典 著

### 『想いをかたちに ～生協、「おたがいさま」、そして地域』

2015 年 11 月刊 / 333 ページ / 1,000 (税込) + 送料  
発行元：生活協同組合しまね

評者：浜岡 政好  
佛光大学名誉教授



本書は、編集の任に当たられた生協しまねの学識理事の田中義昭さんによれば、生協「教育アドバイザー毛利敬典さんの講演記録や報告文をまとめて冊子」化したものである。

本書の構成は、第 1 章「共同購入のこれまでとこれから」、第 2 章「組合員の声から生まれた『商品づくり』」、第 3 章「生協アドバイザーの目にとまった組合員活動」、第 4 章「組合員活動の場を考える」、第 5 章「真のリーダー像とは」、第 6 章「組合員のくらしづくりと生協の役割」、第 7 章「『おたがいさま』が創る世界、その展望」、第 8 章「広がる『おたがいさま』の姿を見つめて」となっており、いずれの文章も生協関係者や「おたがいさま」活動に携わる人びとを前に、一緒に考えたことをまとめたものである。

その意味では、本書は生協の現場で仕事や活動がうまくいかずに悩んでいる職員や組合員理事さんたちにとって目からウロコの指南の書であるといえる。毛利さんの KJ 法を活用した組合員などの「声」分析は圧倒的な説得力をもって「想いをかたち」にする道筋を示している。ここから見えてくることは、もちろん「一人ひとりの声を聴くこと」から始まるのであるが、それをまとめて「かたち」にすることの重要性である。

毛利さんは組合員や職員といっしょに「一人ひとりの声」は、こうすればつながって「かたち」になるということをさまざまな場面を通し

て懇切丁寧に繰り返し繰り返しすすめ、それが組合員や職員の「ブラチック」(慣習化した行為)になるよう援助しているように見える。

毛利さんは大学入学以来の長い生協との関わりを通じて、3つのテーマを自覚できるようになったと言っておられる。1つは、働く人が「やりがい」を感じられるような環境づくりへの応援、2つは、くらし、商品の意味や価値を見だし、生協の役割認識を高める応援、3つは、地域コミュニティの再生につながる、助け合いの会「おたがいさま」の応援である。

1つ目のテーマでは、生協職員にとって生協での仕事の社会的意味は何かを、共同購入や商品開発を通して明らかにしている。ここでのポイントは組合員相互の、そして職員と組合員の関わりをつくること、つながりをつくることである。このことが職員の「やりがい」を生むだけでなく、事業的にも大きなパフォーマンスを創り出すことを明らかにしている。

2つ目のテーマは、生協が職員にとってだけでなく、組合員にとっても自己実現や社会参加の大きな舞台であることを、商品づくりや組合員活動を事例に説得的に展開している。ここでも組合員発の生協商品「満点コロケ」や「プチ肉まん」の開発過程を素材に、一人ひとりの組合員の思いがどのように一つの商品として「かたち」をなしていくかを活写している。

3つ目のテーマは「おたがいさま」の応援であるが、このテーマは狭義の助け合いの会とし

ての「おたがいさま」に対する応援に止まらない。「おたがいさま」に示されている生協運動の質こそが、S.A. ベークさんが問うた「日本型生協は21世紀に生き残れるか」に対する毛利さんの確かな回答であるように思われる。その意味では本書の結論部分といってもよいだろう。

では、「おたがいさま」とは一体何なのか。外形的には、多くの生協で取り組まれている、有償ボランティア「助け合いの会」の変種と見えるかもしれない。しかし、「おたがいさま」の考え方、運営の仕方を見ると、両者は似て異なるものという感が強くする。

毛利さんの整理によると、「おたがいさま」は生協の組織ではなく、「組合員の自立的組織」であること、利用者も応援者も個人として参加すること、財政も自主自立でなり立たせていくことなど、「当事者意識で一緒に創る、みんなで一緒に考える」という想いでつくられたと言う。

だからその運営も、「やりたい人が創る世界」という自発性を大切に、「顔の見える範囲」の人びとを結びつけ、また会員制ではなく、「いつでも、だれでも」参加できるものとし、「困ったら、みんなで考える」、そして「困ったこと」「手助けして欲しいこと」は当事者が自分で決め、応援者が自分で決めることができる仕組みにしてある。

こうした「おたがいさま」が地域での支持を得て、利用や応援を伸ばしてきていることは、他の多くの福祉有償ボランティアの実態を知っているものからすればまさに驚嘆すべき出来事である。なぜ、このような社会的営みが可能となっているのか。その謎を解く鍵の一つが生協が創り出してきた地域における「信頼」への確信であるように思う。「信頼」への確信が「おたがいさま」に関わっている一人ひとりになれば、こうした「開かれた組織」の活動はリストの重圧で身動きがとれなくなる。

その「信頼」を生み出しているのは、長年生

協に関わっているなかで一人ひとりの組合員が身につけている「みんなで創るという感覚、組織というものへの理解、場を創る能力」への確信であり、それは組合員相互の「信頼」だけでなく、同じ地域に暮らす地域の人びとへの「信頼」にもつながっているのである。

自立的組織としての「おたがいさま」は、「生協との緊密な連携関係」をもつことで、一人ひとりの組合員のなかにある「プラチック」化した共感力、共創力を活かすことができるし、他方、生協はこうした自由で伸びやかな活動から絶えず組織のあり方について刺激を受けるだけでなく、地域社会における生協へのまなごしを変えろという恩恵を受けることになる。

以上のように本書は生協の事業や活動が素材にはなっている。しかし、本書はいわゆる生協本ではない。生協という場にしっかりと根を下ろした「世直し」の書である。毛利さんの「自分史」とも重ねながらライフワークである生協を考え抜いた生協の可能性とそれをふまえた日本社会への提言の書である、と私は読んだ。

80年代以降の「消費の爛熟」化、生活文化産業の隆盛のなかで、日本の社会運動はその力を失い、カネと個人主義に取って代わられた。こうした社会の流れを、どうすれば転換し、一人ひとりが生きやすい社会がつかれるか、そのために生活協同組合は何ができるのか。

消費社会が生み出す社会の解体・孤立化を、もう一度一人ひとりのくらしの場から結び直し、社会の力を取り戻す、これが今日の生活協同組合の役割であり、生活協同組合にはその力があるというのが、本書の熱いメッセージである。だから本書は生協以外の「社会」と「運動」に関心のある多くの人にも手にとってもらいたい。きっと、一人ひとりから始まる「社会」づくりの取り組みは役に立つと思う。

書籍取扱い先：生協しまね総合企画室

(E-mail:kouhou@coop-shimane.jp)